

# 狛江の原始・古代の住まい I

平成13年3月30日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

私たちの日々の生活の主要な場である住まい（住居）は、永い間の自然環境や生活様式の変化に応じ、また技術の進歩や社会構造の発展によって、その形を変化させてきました。それはつねに、安全で快適な生活を求めつづけた祖先たちの、試行錯誤の跡であったともいえるでしょう。今回は、このような住居の変遷を、各時代をおってみてゆきながら、狛江市内のそれぞれの時期の遺跡についても紹介してみたいと思います。

## I 旧石器時代の住まい

今から約13000年以上前の旧石器時代の人々は、獲物を求めて移動する狩猟・漁労・採集を主体とした生活を営み、洞窟や岩陰に身をよせてくらしていたと考えられています。このため、これまでは竪穴式住居跡のような明確な住居の痕跡は発見されませんでした。狛江市内でもこの時代の遺跡は若干認められ、数点の石器が出土していますが、住居跡は発見されていません。ところが近年、神奈川県相模原市田奈向原遺跡で、約15000年前の、直径10mで柱穴や炉址を伴う住居跡（明確な竪穴状の掘り込みは認められないが）の可能性が考えられる遺構が検出されました。

## II 縄文時代の住まい

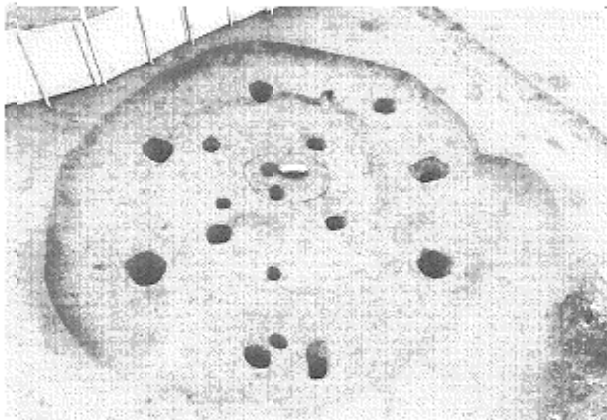
縄文時代は約13000年前から2300年前頃にあたる時代で、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時期に区分されます。縄文時代になっても草創期の段階はまだ明確な住居跡はほとんど発見されていませんが、東京都あきる野市前田耕地遺跡において、やや浅いながらも直径3mほどの不整形円形に掘り込まれた、炉址を伴う竪穴式住居跡と考えられるものが検出されています。一般的に明確な竪穴式住居跡が検出されるようになるのは縄文時代早期頃からですが、現在までのところ狛江市内で最古の竪穴式住居跡は、寺前東遺跡で2軒検出されているものです。縄文時代前期に相当するこれらの住居跡は、直径3.5mと5mの規模で、ほぼ円形の皿状に掘り込まれ、中央部付近に炉址が、その周辺に柱穴が認められました。

縄文時代前期になると、技術の進歩や、早期末頃からつづいた気候の温暖化によって、食糧の安定的供給が可能となり、定住化がすすみ、湧き水を囲んだ台地上などに集落を営むようになります（近年、鹿児島県上野原遺跡等で縄文時代早期の集落跡が発見されつつありますが、全国的に一般化するのには縄文時代前期頃からのようです）。このような集落は、縄文時代中期に入ると更に大きく発展します。こうした大規模な集落跡は狛江市内では弁財天池遺跡で確認されていますが、ここで検出されている住居跡の多くは、直径5～6mの規模をもつほぼ円形の竪穴式住居跡で、深く急斜に掘り込まれた壁と、その内側に廻る壁溝が明確に認められるものでした。一般にこの時期の住居は、炉址がやや片側に寄り、これと逆側に入口施設が設置されるようになり、炉址の形態も石囲いや埋設土器を伴うものなどが認められるようになります。柱穴も太い主柱穴が規則的に配置される傾向が認められます。また、この時期の大規模な集落跡からは、まれに直径10mをこえる大型の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡（住居跡であるか否かは不明だが富山県桜町遺跡等で検出されている）が検出されることがあります。

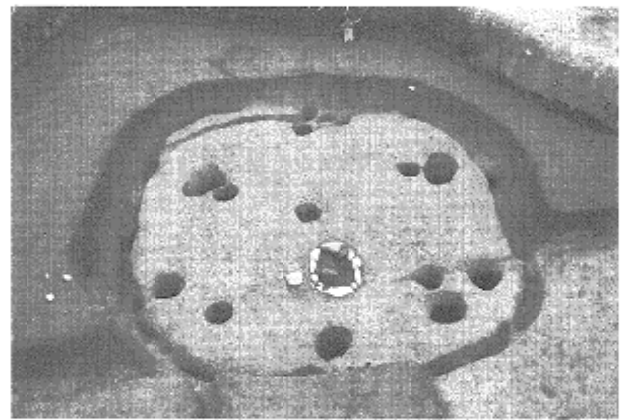
縄文時代中期末から後期前半になると、関東地方から東北地方南部を中心に、入口施設が細長く張り出した柄鏡形住居跡や、床面に比較的扁平な石を敷きならべた敷石住居跡といった、特異な形態の住居跡が現れるようになります。また、これらの住居跡には、張り出した入口部の先端に埋設土器が設置されたり、立石が立てられるなど、祭祀的な様相を示す施設がしばしば認められます。このような住居跡は狛江市内では、弁財天池遺跡や和泉駄倉遺跡で検出されています。

縄文時代後期中葉から晩期の住居跡は、比較的発見例が少ないのですが、一時的に方形プランを呈するものが出現するようです。狛江市内では埴上遺跡で検出（後期1軒、晩期1軒）されていますが、石棒・石剣・石版・土偶・土製勾玉等の祭祀・呪術用具が出土しています。

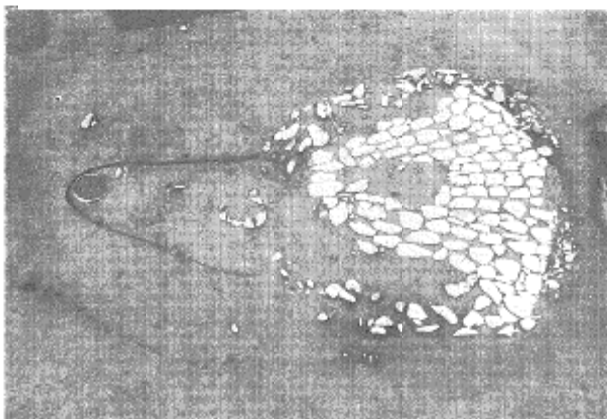
これらのことは、縄文時代中期末頃からはじまった、気候の冷涼化やあいつぐ火山の噴火等に伴う、生活環境の悪化に対する不安感からくる、信仰の新たな展開のあらわれによるものとも考えられます。



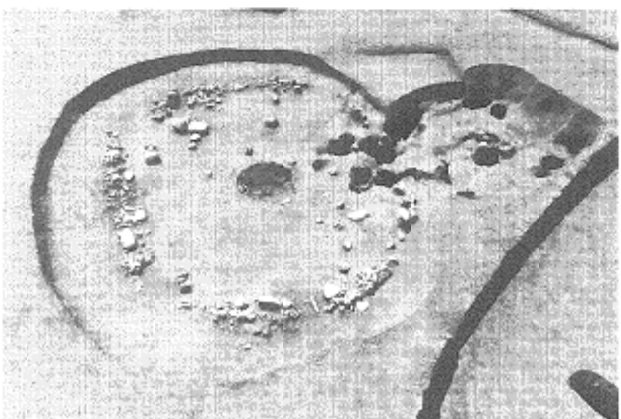
縄文時代中期前半の住居跡（弁財天池遺跡）



縄文時代中期中頃の石囲い炉をもつ住居跡  
（弁財天池遺跡）



縄文時代中期末頃の柄鏡形敷石住居跡  
（弁財天池遺跡）



縄文時代中期末から後期初め頃の  
柄鏡形住居跡（和泉駄倉遺跡）